# 令和４年度全国医師会勤務医部会連絡協議会

**令和４年度全国医師会勤務医部会連絡協議会**

**プログラム**

メインテーマ
「医療新時代を切り開く勤務医の矜持
～コロナを克（こ）えて～」
総合司会：愛知県医師会理事
勤務医部会副部長　浦田　士郎

【日　程】

開　　会

開会宣言　愛知県医師会副会長　野田　正治

挨　　拶　日本医師会会長　松本　吉郎
愛知県医師会会長　柵木　充明
来賓祝辞　愛知県知事　大村　秀章
名古屋市長　河村たかし

特別講演Ⅰ
「医師会の組織強化に向けて」
日本医師会副会長　松本　吉郎
座長：愛知県医師会会長　柵木　充明

特別講演Ⅱ
「社会の共有財として「知のコモンズ」をめざす東海国立大学機構の挑戦
～総合知の活用による人類社会の課題解決への取り組み～」
国立大学法人東海国立大学機構機構長　松尾　清一
座長：愛知県医師会副会長　浅井　清和

報　　告
「日本医師会勤務医委員会報告」
日本医師会勤務医委員会委員長　渡辺　　憲
次期担当県医師会挨拶　青森県医師会会長　高木　伸也

特別講演Ⅲ
「2040 年の医療介護」
一般社団法人未来研究所臥龍代表理事
上智大学総合人間科学部教授
前駐アゼルバイジャン共和国日本国特命全権大使
元厚生労働省年金局長・元内閣官房内閣審議官
香取　照幸
座長：愛知県医師会副会長
勤務医部会部長　加藤　雅通

シンポジウムⅠ
「療新時代の病院機能分化と連携推進
～アフターコロナのあるべき姿を問う～」
座長：愛知県医師会理事　勤務医部会副部長
浦田　士郎
愛知県地域医療構想アドバイザー
伊藤　健一

「感染症対策から考える将来の病院の姿
～愛知県新型コロナ感染症対策療専門部会の立場から～」
独立行政法人国立病院機構名古屋医療センター院長
長谷川好規

「尾張西部医療圏における医療連携
～公立病院の立場から～」
一宮市立市民病院院長　松浦　昭雄

「西三河南部西医療圏における病床整備
－自主的協議体を中心とした医療提供体制の構築－
～公的病院の立場から～」
JA 愛知厚生連安城更生病院院長　度会　正人

「新型コロナは、今後の病院医療に何をもたらしたか？
～民間病院の立場から～」
社会医療法人名古屋記念財団理事長　太田　圭洋

「アフターコロナの地域医療構想
～愛知県病院団体協議会の取り組み～」
愛知県病院団体協議会会長
社会医療法人大雄会理事長　伊藤　伸一

シンポジウムⅡ
「医師の働き方改革～光と陰～」
座長：勤務医部会副部長
社会医療法人名古屋記念財団名古屋記念病院院長
長谷川真司
座長：愛知県医師会理事
勤務医部会副部長　小出　詠子
「働き方改革と急性期医療両立のジレンマ
～公立病院の立場から～」
春日井市民病院院長　成瀬　友彦

「救命救急センターを設置する病院の働き方改革
～公益社団法人病院の立場から～」
公益社団法人日本海員掖済会名古屋掖済会病院院長
河野　　弘

「働き方改革が病院経営に及ぼす影響
～民間病院の立場から～」
名古屋鉄道健康保険組合名鉄病院顧問　細井　延行

「大学病院における医師の働き方改革の現状
～大学病院の立場から～」
藤田医科大学学長　湯澤由紀夫

「医師の勤務環境に関するアンケート結果より
～ダイバーシティの立場から～」
社会福祉法人聖霊会聖霊病院院長　春原 晶代

愛知宣言採択
愛知県医師会理事
勤務医部会副部長　小出　詠子

閉　　会　　愛知県医師会副会長　浅井清和

懇 親 会

**勤務医部会　部会長**
**西原　実**

3 年ぶりです、現地開催は。皆様全員そうでしょうけど、本当に久しぶりです。

日本医師会、愛知県医師会主導のもと、医療新時代を切り開く勤務医の矜持～コロナを克(こ)えて～、をメインテーマとして令和 4 年度全国医師会勤務医部会連絡協議会が名古屋で開催されました。

愛知県医師会副会長の野田正治副会長の開会宣言で始まりました。日本医師会長松本吉郎先生、愛知県医師会会長柵木充明先生のご挨拶を拝聴しました。

今回の対面開催の苦悩について述べておられました。3 人に人数制限したこと、抗原検査を強いたこと、9 月まで悩んだこと等を切実に語っておられました。

また、今回勤務医の矜持としたことについて、医師の矜持にしたかった、と話されておられました。さらに勤務医という枠組みが残っていること自体が問題であり、すべての医師が集う組織でなければならない、と主張されておられました。印象的なご挨拶でした。

来賓として、愛知県知事大村秀章氏が登壇され、2015 年から勤務医問題に取り組んでいること、勤務環境改善支援も積極的に行なっていること等を訴えられました。愛地球博を開催した場所に、ジブリパークを開設する、10 月 15 日に愛知県民 5,500 人、10 月 16 日全国から 5,500 人を招待している、と嬉しそうに話されていました。

河村たかし名古屋市長の代理として杉野みどり副市長が登壇され、10 月 15 日、16 日は名古屋祭りであり、観光施設が無料開放されているので名古屋めしを味わってほしいと話され、さらに 2026 年アジアパラ大会の宣伝をされました。

特別講演Ⅰでは、日本医師会会長の松本吉郎先生が講演されました。その中で卒後 5 年間の医師会会費減免措置を来年 4 月から開始する、と強調されました。根底には日本医師会の組織率の低下があり、ありとあらゆる手を使って会員数を増やさなければならないという切実な思いに溢れていました。少し気になったのが、医師会には、ホテル ON LINE 予約サービス、というのがあるそうで、一流ホテルが安く泊まれる、と紹介されておりました。皆さんご存知でしたか？

特別講演Ⅱでは、国立大学法人東海国立大学機構機構長の松尾清一先生が講演されました。国立大学法人東海国立大学機構って、皆さんご存知でしたか。国立大学法人名古屋大学と国立大学法人岐阜大学が手を組んで、国立大学法人東海国立大学機構を設立したそうです。コロナ禍以前から何度も話し合いをされていたようで、コロナで会うことができなくなっても人間関係が構築されていたのでWEB会議は非常に便利であった、と話されていたのが印象的でした。

日本医師会勤務医委員会委員長の渡辺憲先生から日本医師会勤務医委員会報告がされました。その中で強調されていたのが、全国8ブロックごとに勤務医委員会を設置してほしいということでした。今後真剣に取り組む必要があるかもしれません。

特別講演Ⅲでは、一般社団法人未来研究所臥龍代表理事/上智大学総合人間科学部教授/前駐アゼルバイジャン共和国日本国特命全権大使/元厚生労働省年金局長・元内閣官房内閣審議官である香取照幸先生から、今後の医療、介護についてのお話がありました。その中で主張されたのが、日本の医療制度の国際的評価は極めて高い、しかし日本は欧米と違って民間資本中心の医療提供体制であり、供給がコントロールできず需要もコントロールできない、ということでした。そうは言いながらも改革は必要であり、治す医療から治し支える医療へ、多職種による地域完結・在宅支援型の医療の提供へ、など病院に求められる機能役割の変化が起こってくると話されていたことは印象的でした。またこの流れの中で、かかりつけ医機能は医療システム全体に関わる広範な論点を含んでいると強調されておりました。

シンポジウムⅠでは、医療新時代の病院機能分化と連携推進～アフターコロナのあるべき姿を問う～というテーマについて5人の先生方からお話を伺いました。

名古屋医療センターの長谷川院長は、今回日本でできなかったことの分析が必要と言われ、もっともだと思いました。また、医療者を守りながら治療ができる感染対策の難しさ、医療従事者、看護師の確保の難しさにもふれておられました。一宮市立市民病院の松浦院長は、病院間での連携について述べられました。いちみんネットという地域医療連携ネットワークがあり、3病院による合同戦略会議をオンラインで行い、連携がスムーズにいったという事でした。JA愛知厚生連安城厚生病院の度会院長は西三河南部医療圏における特徴について話されました。人口は不変で、高齢者割合は増えているにも関わらず、公立病院の病床は削減されているそうです。特例措置による増床で乗り切ったそうです。社会医療法人名古屋記念財団の太田理事長は、財務省の医療制度改革への関与が増大していることを危惧されていました。集約化すべきものと分散化すべき物があり、集約化＝効率化ではない、と話されていたのが印象的でした。また、ER型地域密着急性期病院という類型が必要である、という話も初めて耳にしました。社会医療法人大雄会の伊藤理事長は愛知県病院団体協議会（あいち五病協）の紹介をされました。この協議会の会長もされており、この協議会が十分に機能し、地域連帯によって感染を乗り切れた、との事でした。

シンポジウムⅡでは、医師の働き方改革～光と影～というテーマでやはり5人の先生方が登壇されました。春日井市民病院の成瀬院長のお話は、驚かされることがありました。時間外の緊急手術の際には麻酔科医を業者から派遣してもらっているとの事です。沖縄では無理でしょうけど、いい考えだと思いました。医師事務作業補助者を増員したり、血管内検査や治療の助手を技師に移行したりしているとの事でした。ただ、一人当たりの労働時間が減るため、必要な医師数は増加する、と危惧されておりました。それにも増して、大学に依頼した当直派遣がどうなるか、ひどく心配されていました。公益社団法人日本海員掖済会名古屋掖済会病院の河野院長は日本海員掖済会の説明から始められました。脳神経外科で医師が一人増えて時間外

が減ったが、医師増員が困難な心臓血管外科は時間外が多い、と話されていたのが印象的でした。また、研修医から自前でスタッフを育てようとしているそうです。名古屋鉄道健康保険組合名鉄病院の細井顧問は社労士を含む働き方改革ワーキングを作っているとの事でした。試算では、働き方改革をすることで医療収入が2億1千万円減少するが、働き方改革が達成できないと若手医師の確保が困難になると強調されました。ただ、医業収入が減ることで医師のモチベーションが低下するのでは、と心配されていました。一方で、この改革が医師の働き方に利益になるのか注視する必要があると考えておられるようです。藤田医科大学の湯澤学長は、大学だけでなく研修指定病院が地域に医師を出すべきだと、恐ろしいことを強調されておりました。無理です。最後に社会福祉法人聖霊会聖霊病院の春原院長がアンケート結果を話され、シンポジウムが終了しました。

最後に例年通り、愛知宣言が採択され、会は終了となりました。その後、懇親会では、我々3人と鹿児島県医師会の年永先生と長崎県医師会の田畑さんと同席となり、美味しく、楽しくお食事しました。来年は青森です。紅葉が美しい頃だと聞いています。楽しみです。

**副担当理事　稲冨　仁**

2022年10月15日に愛知県名古屋市にて行われた全国医師会勤務医部会連絡協議会に出席した。新型コロナ感染症により昨年度はWEB開催であったが、流行がピークアウトしてきたこともあり久しぶりの現地開催であった。参加者は前日に抗原検査での陰性確認を行い十分な健康観察の上で出席するように指示された。各都道府県3～4人と多くの参加者が集まったが、会場の座席も指定されておりパーソナルスペースも確保され感染対策も十分であったように思える。感染流行の終息を見据えて、今年度は「医療新時代を切り開く勤務医の矜持～コロナを克えて～」をメインテーマとされた。

松本日本医師会長による特別講演Ⅰでは、日医会員数のピークは60.4%だが、この20年で10%減少しどうにか半数以上を保っている状態だが、わが国の医療を守るために決して50%を切ってはいけない。国民の生命と健康を守るためには医師会の組織強化に向けた取り組みが必要であると力説された。医師たる者には、すべて医師会活動に参画し、医師会を通じて医療界が求める制度・政策実現の決定プロセスに関与して欲しい。自分事として医師会活動を体験し関心を持ってもらう。医学部卒後5年間の会費減免（都道府県医師会・郡市区医師会なども足並みそろえて）や入会負担や煩雑な手続きの軽減・異動した場合も手続きを簡略化し、群市区医師会入会時に県医師会・日本医師会にも同時に入会するように定款の変更を行う。医師会入会のメリットを周知：賠償責任保険、医師年金、ホテル割引など、医師会の発展に向けての具体的な方向性を示された。

特別講演Ⅱは東海国立大学機構　松尾清一機構長のご講演。「社会の共有材として「知のコモンズ」をめざす東海国立大学機構の挑戦」。IT化などがかつてない規模とスピードで広がり、世界は変化しているが、解決困難で深刻な多くの課題に直面している。その中でも我が国は少子超高齢化、経済停滞、社会システムの硬直化・制度疲労など将来への不安が大きい。日本の医療システムは世界に誇れるものであるが、世界から見ると閉鎖的な印象を持たれている。日本は超高齢の課題先進国でありリーダーシップをとるべきであると考え、東海大学がアカデミアの中核として、国際競争力を高め、地域分散型社会の実現に貢献するための、教育・人材育成、研究・価値創造、社会連携・産業連携、国際展開などの取り組みを紹介された。

特別講演Ⅲは上智大学総合人間科学部教授の香取照幸先生より「2040年の医療介護」についてのご講演であった。世界に誇れる日本の国民皆保険制度の継続の危機はCOVID-19禍を通じ

て自由開業・自由標榜・独立採算の診療所や民間病院のフリーアクセスにより支えられているという我が国独特の医療システムの構造問題の露呈によりハッキリしてきた。世界的超高齢化社会の日本において、医療に求められる役割は大きく変化する。治す医療から治し支える医療になり、QOL を重視するものとなる。病院には治すに特化した高次機能・専門医療、他方では治し支えるを担う在宅・地域医療が必要となる。治し支えるには医療だけでは実現不可能であり、医療・看護・介護・生活支援、包括的ケアが必要であり多様な専門職の連携・協働による地域包括ケアネットワークの実現が大切であることなど近い将来について詳しく話された。

日本医師会勤務医委員会報告でも COVID-19 禍で勤務医の疲労が限界にきていることや、すぐ目の前の医師の働き方改革の着実な推進について、医療現場が大きく変化することになり勤務医にとっても喫緊の課題である。松本会長のお話の流れと同様に勤務医の意見を集約し、多くの医師会活動参加が重要であると力説された。

午後のシンポジウムⅠは COVID-19 禍を経験してどうだったか？シンポジウムⅡは医師の働き方改革について、いずれのテーマも公立病院・大学病院・社会医療法人など各々異なる立場からの経験や考え方を伺うことができた。

感染対策下で行われた懇親会も多くの先生方が参加されており、久しぶりの現地開催を皆さんとても喜ばれていた。次年度の開催県は青森県。個人的にはあまり行ったことがない場所であり、独特の文化や自然に触れながら意見交換するのも楽しそうだと思った。

**令和４年度　全国医師会勤務医部会連絡協議会収録映像のオンデマンド配信について**

本協議会の収録映像が下記の期間中、協議会ホームページにて公開されておりますので、是非ご視聴ください。

令和４年度　全国医師会勤務医部会連絡協議会ホームページ
■公開期間：令和４年 11 月 18 日（金）～令和５年２月 20 日（月）
URL：https://kinmuiaichi.com/